老子 上善若水・小国寡民　解答

A　語句の意味と読み

(1)　恵みを与える・役に立つ（うるおす）。／★「利益」の「利」。水が草木や生き物をうるおし、生かすことをいう。「するどい」の意味ではない

(2)　衆人＝多くの人々・世の中の人々／悪む＝いやがる・きらう。／★「悪」は「あく（わるい）」ではなく「にくむ」と読む。「憎悪（ぞうお）」の「悪」

(3)　近い。／「幾」は「いくばく（どれほど）」「ほとんど」とも読む字。水は道そのものではなく、道に「近い」と言っている

(4)　善しとし＝よいとして（よいと考えて）。②の「善く」は「うまく・十分に」という意味で、「利す」を修飾する副詞。／★⑤の七つの句は「〜は…を善しとす」の同じ形。読み方は教科書によってちがうが、「よいとする」意味は共通

(5)　とがめ。人から非難されること・過ち。／「尤」は「もつとも」とも読む字。ここは名詞で「とがめ」

(6)　少ない。／「寡黙（かもく）」「多寡（たか）」の「寡」。「小国寡民」＝国は小さく、人民は少ない

(7)　人の十倍・百倍もの働きをする便利な道具（文明の利器）。／★「什」＝十、「伯」＝百。「十人・百人の兵の組で使う武器（兵器）」とする説や、「いろいろな道具」と訳すものもある。お使いの教科書に合わせること

(8)　甲兵＝よろいと武器（武装した兵）／陳ぬる＝並べる。ここでは、兵や武器を並べて陣を敷き、戦いに用いること。／⑩の「舟輿（舟と車）」と対になっている。乗り物も武器も、あっても使う場面がない

B　句法

(9)　若／比況（「〜のようだ」とたとえる）／「ごとし」は助動詞にあたり、書き下し文では助動詞を平仮名で書くきまりだから。／★白文「上善若水」は「水」から「若」へ返って読む。「如」も同じ働き。「若」は「もし（仮定）」「なんぢ（あなた）」とも読む

(10)　「不」＝平仮名の「ず」（争はず）、「無」＝漢字のまま「無し」（尤め無し）。「不」は助動詞「ず」にあたるので平仮名、「無」は形容詞「なし」にあたるので漢字で書く。／文頭の「夫れ」は話を起こす語で「そもそも」、「唯だ」は「ただ〜だけ」。「唯だ〜、故に…」＝ただ〜だからこそ…

(11)　使役。「AをしてBしむ」（民をして〜徙らざらしむ）。／★「使」は助動詞「しむ」にあたるので、書き下し文では平仮名。「A」に送り仮名「をして」をつける。⑧⑫も使役。ほかの文章では「使」が仮定（もし〜させたら）を表すこともある

(12)　⑧＝逆接（〜けれども・〜ても）。⑨＝順接（〜て）。／★「而」は置き字で読まないが、前後の意味の関係（順接・逆接）を送り仮名で示す。⑧＝「道具を持っていても、使わない」

(13)　「〜と雖も（いへども）」。〜であっても・〜だけれども（逆接）。／★「雖」は下から返って読み、「と」を送る。⑪の「甲兵有りと雖も」も同じ形

(14)　「〜する所無し」。〜することがない（〜する場面・必要がない）。／「所」＋動詞で「〜すること・〜する場所」。⑪の「之を陳ぬる所無し」も同じ形。③「衆人の悪む所」の「所」とも同じ働き

(15)　「（自分たちの食べ物を）おいしいと思う」の意。形容詞「甘し」を「AをBしとす（AをBだと思う）」と読んで、動詞のように使っている（意動用法）。／★「食べ物を甘くする」ではない。すぐあとの「其の服を美とし」（衣服を美しいと思う）も同じ形

C　主語・指す内容

(16)　主語＝水／低い所（人がいやがる、低くじめじめした所）。／水は高い所から低い所へ流れ、低い所にたまる。王弼の注にも「人は卑（ひく）きを悪む」とある

(17)　民（人民・国の人々）。／★⑧の白文「使有什伯之器而不用」には、「使」の下に「誰に」が書かれていない。⑨「民をして」の「民」が省かれていると考える

(18)　この国の人民と、隣の国の人民（隣り合った国の人々どうし）。／直前に「隣国相望み」とある。「相」＝たがいに

D　口語訳

(19)　水は、あらゆるものに十分に恵みを与えながら、ほかと争わず、多くの人々がいやがる（低い）所に身を置く。だから、（水は）道に近いのである。

(20)　そもそも、ただ争わない、だからこそ、とがめを受けることがないのである。／「唯だ〜、故に…」で「ただ〜だからこそ…」

(21)　舟や車があっても、それに乗ることがなく、よろいや武器があっても、それを並べて戦いに用いることがない。

(22)　隣の国がたがいに見えるほど近く、鶏や犬の鳴き声がたがいに聞こえるほどであっても、人民は年老いて死ぬまで、（隣の国と）たがいに行き来することがない。／★「相」＝たがいに、「至るまで」＝〜になるまでずっと。「聞こゆるも」の「も」は逆接

老子 上善若水・小国寡民　解答／現代語訳

E　内容・記述

(23)　水は、あらゆるものに恵みを与えながら他と争わず、人のいやがる低い所に身を置くので、道に近いあり方をしているから。(五十六字)　／★水のよさは「恵む」「争わない」「低い所にいる（へりくだる）」の三つ。④「道に幾し」が結論

(24)　文字のなかった大昔のように、縄の結び目で約束や記録をする素朴な暮らし。(三十五字)　／「復た」＝もう一度。「結縄」は文字ができる前のやり方とされ、『易経』(繋辞伝）にも、大昔は縄を結んで世を治め、のちの聖人が文字にかえた、という意味のことが書かれている

(25)　自分たちの食べ物・衣服・住まい・風俗に満足していて、よそに何かを求めようとする欲がないから。(四十六字)　／★「隣の国と仲が悪いから」ではない。王弼の注は「欲し求むる所無し（欲しがって求めるものがない)」とする

F　文学史・思想

(26)　『道徳経』／老荘思想（道家の思想)。　／上篇（道経）・下篇（徳経）の全八十一章。『史記』は、老子が関所で上下二篇・五千字あまりの書を残して去ったと伝える

(27)　無為自然。人為的な作為やはからいを捨て、自然のままにまかせること。便利な道具を使わず素朴な暮らしに満足する⑧のあり方は、その考えの表れである。　／「無為」は何もしないことではなく、わざとらしい手出しをしないこと。『老子』第三十七章に「道は常に無為にして為さざる無し」とある

(28)　大いなる道がすたれたからこそ仁義が説かれるようになったのだとして、人が作った道徳である仁義をことさら重んじることを批判し、道にしたがう無為自然の生き方を説いた。　／『史記』も「世の老子を学ぶ者は儒学をしりぞけ、儒学もまた老子をしりぞける」という意味のことを記している

【現代語訳（全文)】

【第八章】最高の善（もっともすぐれたあり方）は、水のようなものである。水は、あらゆるものに十分に恵みを与えながら、ほかと争わず、多くの人々がいやがる（低い）所に身を置く。だから、(水は）道に近いのである。

（水のように生きる人は、）身を置くには（低い）大地をよしとし、心は（淵のように）深く静かであるのをよしとし、人に与える（人とつきあう）ときは思いやりのあるのをよしとし、言葉は誠実であるのをよしとし、政治はよく治まるのをよしとし、物事を行うには能力（はたらき）があるのをよしとし、行動するにはふさわしい時にかなうのをよしとする。そもそも、ただ争わない、だからこそ、とがめを受けることがないのである。

【第八十章】国は小さく、人民は少ない（のがよい)。(人々が）人の十倍・百倍もの働きをする便利な道具を持っていても使わないようにさせ、人民に命を大切にさせて、遠くへ移り住まないようにさせる。舟や車があっても、それに乗ることがなく、よろいや武器があっても、それを並べて戦いに用いることがない。

人々にもう一度（大昔のように）縄を結んで（約束や記録のしるしとして）それを使うようにさせ、自分たちの食べ物をおいしいと思い、自分たちの衣服を美しいと思い、自分たちの住まいに安心して暮らし、自分たちの風俗を楽しむようにさせる。隣の国がたがいに見えるほど近く、鶏や犬の鳴き声がたがいに聞こえるほどであっても、人民は年老いて死ぬまで、(隣の国と）たがいに行き来することがない。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる